

楽しい国語の授業づくり

— 中学校一年から三年までを通して —

福田 伸子

はじめに

教員になって六年目。ふり返ってみると、校外外を問わず「学習意欲を喚起するための」といったテーマの研修会がなんと多かったことか。今の中学生というのは、それほど意欲がないのだろうか。授業のつくり方に問題はないだろうか。

とにかく楽しい授業を工夫したい。私達は週四時間ずつ、二百人前後の生徒に授業をするのだから、一ヶ月に一本のホームランより毎回安打をねらいたい。そして、それを積み重ねて確かな国語力をつけたい。そういう気持ちでこの三年間試みたいことを、まとめてみた。

一、指導目標とその手立て

先に述べた願いから、次の三つを目標とし、またそれぞれにつ

いて手立てを考えてみた。

1、授業の中で、生徒が主体的に動くことができる。
2、自己の内面をみつめることによって、生徒が精神的に成長できる。

3、生徒に、情報を整理して理解する楽しさを身につけさせる。

まず、目標1については、次の三つの手立てが考えられる。

① 生徒が興味をもてる教材を扱う。—生活経験と結びつくところのある（記憶の底の感覚を呼び醒まして問い直すような）教材。もしくは、想像の枠を広げたり、ゲーム性のある面白い教材など。

② 学習の個別化をはかる。—能力や適性に合わせて、表現方法が選べるようにする。

③ 学習の目的を明らかにする。—各単元、各教材、各作業の目的がいつもわかるよう工夫する。

目標2については、次の二つの手立てが考えられる。

① 作品、意見をたくさん読ませる。―友達の心の中を次々とのぞくことは、友達の成長と比較することで次へのステップが踏み出せるはずである。

② 自分史をめざす。―中学校のたった三年間で、生徒は顔も体も心も大きく変化する。その変化をとらえる意味で、作品は書きつ放しにせず、一年間の最後に綴じて、「その時の自分」を残す。

目標3については、次のような手立てが考えられる。

① 文章の構造を明らかにする。―情報化社会に生きる人間の思考は、まず自分に与えられた膨大な量の情報を整理し、まとめ、かみ砕いて後に始まるのだろうか。中学生にとって、それはすべての授業で要求される。どこに図を入れるか、疑問をメモするか。情報の構造を明らかにし、一目で自分の頭に入るくらいに整理する力をつけるために、書きこむことによって全体が見えるようなプリントを与えることにする。

この三つの目標を達成するために、私はノートを使わず、プリントで授業をすすめる方法をとった。一時間毎のねらいをはっきりさせることが一番の目的である。今の中学生のペースで、「聞きながら、書きながら、考えて発表する」という芸当が一日六時間も続くわけではない。そこで、「書く」の部分のあまり重要でないと思われる作業（表の外枠など）を省略して、「考えて発表する」にかける時間を増やすのである。

二、指導の実際

(1) 印象の強い作品を読んでイメージを広げる。

教科書で扱われている教材は、ある意味で完成されたものである。しかし、仮に六時間扱いの教材があったとして、順調にすすんで二週間、行事等で運が悪ければ、とびとびで三週間ほどしかけて学習するわけで、作品の世界にひたることは容易ではない。そこで、しばしば発展教材を使って考えを深める方法をとることになる。その中でも特に印象の強かったものに、一年時「平家物語」の「敦盛の最期」学習後に読ませた「木曾最期」、二年時、安岡章太郎の「幸福」学習後に読ませた「サーカスの馬」がある。

前者は、「敦盛の最期」で直実と敦盛の人間性について考えたので、「直実を出家に追いこんだ戦とは、武士とはどんなものだったのか。」を、他の人物の印象的な場面を読むことでイメージを広げさせることにした。中学一年ということで、原文を詳しく読むことはせず、注を参考にどんどん口語訳させた。「木曾最期」の戦のイメージも含めて、生徒の感想は次のようである。

私は、戦というものは本当にいやだと思った。戦さえなければ、こんなつらい思いをする人はでなかったと思う。この時代には、熊谷のほかにも、涙を飲んで出家した人がいると思う。それで家族や家来を見捨ててもいいか？ これはとてもむずかしい

いことだと思う。でも、このむずかしくつらいことをのりこえて出家した時、初めてその人に、人間らしい清らかな心がそなわると思う。

また、自分の行動を後悔しながら、それでも武士でいたいと思つた人も、ある意味では立派といえるかもしれない。しかし、自分の行動を後悔する、くやむ、ということは、人間らしい心をどこかに忘れているのだと思う。その人はその人なりに苦しんでいるのだからうけれども。(女子)

「サーカスの馬」を発展教材にした時は、ほとんどの生徒が「幸福」の主人公、「サーカスの馬」の主人公・安岡作者として考えていたが、二つの作品を読んで、何か奥にある負い目や、一人の自分の姿などをグッとつかみ出すような安岡章太郎の世界に入ってしまったようなので、そのままにしておいた。「幸福」だけではそこままでいけなかった。次の感想文は、感想を離れて、主人公の生き方からストレートに自分自身を思つて書いているものである。

自分は、かならず動くとはじをかく。全く気合いが入っていない。世の中を甘く見てるせいかもしれない。情けないことは、一日に一回かならずある。運のわるい運命だと思つ。でも慣れているからおそれはない。

ある本にはこう書いてあった。「刀を作るには、ヤキを入れたらたたいたりして、じょうぶな刀になるのだ。いつもはじをかく

とそれを思い出して、たえるのです。でも自分が悪いのです。

(男子)

(2) 遊びの要素をとり入れることで興味をもたせる。

次に挙げるのは、一年生の表現Iで行なった「表現ゲーム」である。人にわかつてもらえるように説明(表現)するのがいかに難しいか、自分の使える言葉がどれだけ少ないかを実感することができる。

まず、教室を右半分と左半分に分け(人数をそろえる)右半分の生徒にはAの紙を、左半分の生徒にはBの紙を配る。(資料1)紙をもらったら、あらかじめ配られた説明用紙に、それぞれの言葉の説明(例えばAの紙なら「サラダ」とは何か、「松」とは何か)を書く。

時間を決めて、一旦全員の説明用紙を集め、今度は、右半分にはBの言葉について説明してある紙(さっき左半分の生徒が書いたもの)左半分にはAの言葉についての説明を配る。そして、そこに説明してあるものが何なのかを、下の解答欄に書く。たくさん正解し、させたものの勝ちとする。

生徒の書いた説明に次のようなものがあつた。「小学生は夏休みにつける。ふつうは毎日つける」「走るのが早い、横断歩道をしょっている動物」「細長い鉄でできた、三次元の迷路」答えは順に「日記」「しましま」「ジャングル・ジム」である。

二年生の表現単位では「悪魔の辞典」を作った。あるエッセイストが、題材に困った時には家族に何か物の名前を言ってもらうと雑誌に書いていたのをヒントに、作文の題材さがしは「物」から始めることにした。「あ」～「ん」の順で言葉を集め、その目的意識を高めることが、辞典作りの目的である。

クラス内で「あ」～「ん」の担当を決め、項目毎にカードに内容を書いて提出させ、四クラス分をまとめて優秀作を選び、配列する。今回は私がカード選びをしたが、生徒の中で辞典編集委員をつかって選ばせれば、もっと生徒の意見が反映できたかと思う。資料2は辞典の「か」～「き」の部分である。

(3) 想像することで、教材を自分のものにする。

小説の続きを書く作業が、生徒は好きである。丁寧に読んだあとなので、登場人物のイメージが出来上がっていて、頭の中で動かしやすいのだろうか。

想像するのは、小説の続きばかりではない。例えば短歌などは、作者の思いが凝縮されている分、読者は想像を広げる楽しみがある。二年生の単元「感性を豊かに」では、教科書とは別に、石川啄木の短歌を紹介し、歌そのものから想像をふくらませてドラマを作ろうを試みた。次の作文は、「こほりたるインクの罫を 火に鬨し 涙ながれぬともしびの下」という歌からイメージを広げたものである。

ふるさとに手紙を書こうと思ったら、インクがこぼっていた。ひきだしの中に入れていればこもらなかったろうに。外にポツンと出ていてこぼってしまったインク。それが、ふるさとから一人追い出されてぼつんとしている自分に思えて悲しくなった。

インクを火にかざしてとかしているのと、水滴がポトポトおちた。「ああ、お前もさびしくて泣いてしまったのか」とつぶやいて涙を流した。(女子)

(4) 学習の個別化をはかる。

一年生の単元「独り立ち」に「自分を書く」というのがある。中学生になって独り立ちするためには自分をよくみつめてみよう、というのである。

生徒はここで初めてまとまった文章を書くことになる。ただ「自分について書きなさい。」では、立ち往生するのは目に見えている。しかもこちらはまだ生徒についての情報をあまりつかんでいないので、各々にアドバイスできないという状態である。

そこで、自分についての切り口をはっきりさせるために、次のA～Eのコースを用意し、選ばれることにした。

○Aコース—中学生になった今の自分について、誰かに手紙を出すつもりで書く。相手は架空の人物でも良い。小学校時代の担任の先生に出すつもりなら、中学校生活の報告のような感じで、書き易い。

○Bコース―自分自身を主人公にし、日常生活を小説風に書く。

これは、一番難しいコースなので、Bコースを選んだ人の作品には写真を貼って返す。(雑誌のグラビア等)

○Cコース―自分の友達を紹介することで、その中にいる自分を考える。自分のことより友達のことの方が書き易く、一人一人は短い文章になるので、書くことの苦手な生徒でも書けるため。

○Dコース―宇宙人がもし自分を見つけてUFOに観察報告書を送ったら、どんな風にかかれると思うか、想像して書く。(資料3参照)

○Eコース―普通原稿用紙。形式自由。

(5) ひとりひとりの対話を心がける。

生徒が感想文なり意見文なりを書く時は、当然のことだが、それを先生が読んでくれることを期待し、どういう形で返ってくるかを気にする。

同じハンコでも、単なる検印と「よくできました」「もう少しです」の印とでは、反応が全然違う。後者は、少なくとも読まなければそれを押さないからだ。だが「もう少しです」というならば、何をすればよいのか。

それを明確にするために、三年生になってから、試験後、資料4のような「弱点カルテ」を始めた。これは、試験を返して答えあわせをする時、自分の間違いの原因によって何点ひかれている

かを記入し、グラフにするものである。

グラフを見て感想を書く。例えば「私は漢字が大のニガテであります。グラフでも文法と並んでトップ! (実は文法も!)」このグラフ、ズバリです。(女子)」「8点も損してしまった。いつも不注意ミスをしてしまう。泣けてくる。(男子)」などに全員返事を書いて、次の試験の前に返す。

ふだんから意見集に度々載ったり、机間巡視中にもどんどん話ができる生徒はそれでいいのだが、そうでない生徒はこういう機会にいろいろ書いたり、その他の提出物で「対話」することで意欲をもたせたい。

(6) 単元目標に関わって短文を書かせる。

授業中での「知識」や「練習」はすべて国語力、すなわち生きる力につながるはずなのに、生徒の頭の中では、そのことがなかなか今からの人生とはつながらない。教材で学びとったことを、自分とどう関係つけていくのか、何のために勉強するのか、常に確認しながらすすめていくことで、生徒は主体的に考えることができるようになるのではないだろうか。

一年生の単元「想像豊かに」の中の詩「名づけられた葉」を扱った時には、学習後、ひとりひとりの名前の由来を調べさせた。

例えば、「森万史―父方の昔の商売の屋号が『万屋』(よろずや)」といった。母方の、ぼくから見たおじいちゃんの名前が「万里(ばんり)」という名前だった。「万屋」と「万里」の

「万」をとって、万の歴史ということで「万史」となった。」児玉容子「誰とでも仲良くなる優しい子になるように、願いをこめて父と母でつけたそうです」などである。

この詩の主題が「人間はひとりひとり、名前をもったかけがえないものだから、誰のまねでもない生き方、命を輝かせるような生き方をしなければならぬ」ということで、名前にこめられた願いを知り、自分を大切に考えるために書かせた。

当時は五クラスの授業をうけていたが、目的から考えて全員のをプリントに載せた。生徒はもちろんお互いの名前の由来に感心しあっていたが、私自身「こんなに大切に思われている子供達を預かっているんだなあ。なのに……」と反省する材料になった。

(7) 作業の目的を明確に示す。

資料5は、二年生の単元「自然と人間」の論説文「瀬戸内海と赤潮」の学習プリントである。

論理的文章を学習する時、まとめる、表にする、などという方法をつかって内容をつかみ、展開、構成をとらえていくが、たいいの場合、教える側が方法を提示し、生徒は指示通り作業するだけになり易い。

しかし、実生活で論理的文章に触れる機会は多く、その時はひとりりで内容を整理し、つかまなくてはならないわけで、先生が「ここからここまでは表にしてみたら」などとは言ってくれな

い。

そこで、資料5では、その練習として、⑥⑦⑧を自分で整理するために①②③④⑤の作業をする、という方法をとりに入れた。つまり、順番を最初から追っていくのではなく、「段落の要点をまとめる」「いくつかの段落をひとつにまとめる」「表をつくって整理する」という作業を、⑥⑦⑧を自分の力でつかむ」という目的のための手段として扱うという方法である。

ここでは表にまとめるのが一番簡単なのだが、その他いろいろ工夫するものもあり、「主体的に」という意味ではおおむね良かった。

(8) 作品や意見をたくさん読ませる。

資料6は、冬休みの課題である。実際の用紙はB4サイズだが、縮小コピーして方法を示したものを必ずつける。この課題の意図は、「とにかく一冊以上は本を読んでほしい」ということなのだが、これの提出後、全員の読んだ本を紹介して読書案内を作るという目的もあった。友達の見解を読んでその本を読もうかという気になれば、というつもりで。

「星の王子さま」サン＝テグジュペリ……作家サン＝テグジュペリは、飛行機の操縦士でもあるのです。この本は、友人レオンがユダヤ人なのでよもうあえないかもしれないかと思って形見に書いたのです。この本には、いろんな、だじなものがかく

されているので、絶対読んで得すると思えます。でもそのかくされたものがわからなかったら、どーしよもないケド。(女子)

(9) 自分史をめざす。

資料7は、「その時の自分のもついろいろなもの」を新聞形式でまとめる「夏休み新聞」である。一年生の時は切り抜きのスペースが多く、二年、三年と書くスペースを増やしている。

(10) 構造を明らかにする。

資料8は、一年生の単元「想像を豊かに」の「空中ブランコ乗りのキキ」の学習プリントである。(実際生徒に渡すプリントは、○や□の中が空白)

このプリントは、主人公キキにとって命よりも大事な「人気」を軸にして、他の登場人物の気持ちなどが書きこめるように考えている。右上から下、そして左上への順番で学習し○が人気を示した線であることに気づいた時点で赤鉛筆でたどっていくと、三回宙返りで得た人気を魔法の力で超えた時点で、キキが人間としての命を失ってしまったことがわかるように考えた。

情報を整理するということは、同じ次元で部分を分けていく方法もあるが、物語の場合は必ずいろいろな要素が複雑にからみあっているので、主題につながる要素を選び出して「軸」を決めなければ、あれもこれもで混乱してしまうであろう。そのため、一

枚のプリントで数時間かけて学習し、最終的には全体の構造がひと目でわかるようにした。

三、考察

(1) 生徒が主体的に活動することについて。

現在の生徒が三年生になって、生活指導上はたくさんのお問題を抱えており、一、二年時に比べて教師の負担は大きくなっていく。しかし、授業については全く反対で、一年から二年、二年から三年へと進むにしたがって、どんどん面白くなってきた。その原因は、生徒が授業のパターンを呑み込み、私の方法を知ってくれたからではないかと思う。

みんなの意見を集めたプリントには、「なぜだか面白い文章」とか、「ちょっとイイ、ほのぼのした文章」とかがたくさん載っている。また、「こんなことを書いても仕方がない」と思っ、紙の前にポットとしていたような題材でも、他の生徒が堂々と書いて読んで読んでみたらけっこう良かった、とかいうこともあって、生徒は少なくとも、書くことを楽しみにしているようである。

「個別化」というと大げさになるが、真面目に書いた文章には必ずどこか良いところがある。それを認めることが次への意欲につながる、主体的に活動することに結びつくのではないだろうか。それはムリヤリ認めるのではなくて、心から「いいな」と思

わなければだめなのである。そのためには、生徒と良くつきあっておく必要がある。「あの子」が「こう書いた」から心にグツとくるのであって文章の表面だけ見るのだったら、文章の上手な生徒しか活躍できない。

わが校は一学年十二〜十三クラスで、三年間続けて授業でお目にかかる確率は少ない。また、適正規模の学校に比べれば、生徒と接触するチャンスも少ない。しかし、三年間、機会をとらえては書かせることによって、生徒の様々な考えを知り、またそれに返事を書いたり、プリントに載せたりすることで、私自身の情報も与え続けた。その接触のつみ重ねが、三年生の授業につながってきたのだと思う。

(2) 自己の内面を見つめることによる精神的な成長について。

意見集・感想集——これが、生徒にとっては一番の楽しみであり、私にとっては、最も時間と労力のかかる、肩こりと睡眠不足のタネである。プリントに自分の文章が載り、約二百人の生徒に読まれることは、他の場面でそうそうあることではない。だから、プリントを配ると大騒ぎになり、全員読み始める静かになり、次第にクスクスと笑い声。そして、質問や感想が出たりする。

友達との話題はほとんどテレビや音楽のことで、あるひとつの問題をめぐって真面目に意見を言い合うことなどはほとんどない。これは自分もそうだったからよくわかる。だがそれは、話さ

ないというだけで、ひとりひとりの中では、いろいろな真面目な考えがうずまいてはすだ。それをひき出すきっかけは、果たしているのではないかと思う。ひとつのテーマで書いているので、自分の考えと比較し易く、精神的な成長段階がわかるということだ。

最近、意見集のプリントを出すのが遅れがちになっている。載せたいと思う意見が多くて迷っているのが原因である。ただ、これは、成長した生徒の数が増えたことの証明にはなるかもしれないが、ひとりの生徒にねらいをしぼって見てきたわけではないので、ある生徒がどういう風に成長してきたかは、本人にしかわからない。三年間を通してのテーマを設定していなかったのが原因で、これは今後の課題にしたい。

(3) 情報を整理して理解する楽しみを身につけさせることについて。

メモをとる、日記を書く、手紙を書く、など、日常生活において書く作業はたくさんあるが、生徒の書く作業で最も大きな比重を占めるのは、ノートをとることだ。

ただ先生の話聞いて鉛筆でズラズラ書くだけのノートでは、役に立たない。他教科の自習課題で、「〇ページから〇ページまでの内容をノートにまとめなさい」というのがよくあるが、要点を浮かび上がらせる方法を知らない者にとっては、「まとめる」とはどういうことかわからないのである。

一時「知的生産の技術」というのが流行したが、その中学生版のようなものをもっと与えてやらなければならぬと思う。プリントのねらいは、例えば「主人公の気持ちの変化」とか「周囲の反応」とか軸を決めて、全体の構造がひと目でわかるように、ということだ。だから、総合的に考える場合は、何枚かのプリントを並べて見ることになる。一枚一枚、整理のし方を示しているつもりだが、生徒はどう生かしているのか、夏休み新聞などを見ると、少しは効果が表われているようである。

四、今後の課題

以上は、教科書に沿って、「次はこういう風に料理してみよう」「こういう進め方が面白いんじゃないかな」とその都度行なってきたものをまとめたことで、指導目標の三つはこの三年間、常に念頭においてきたことである。だから、今後の大きな課題として、仮説―実践―検証という手順をふむということがある。その具体的課題は次のようなものである。

- (1) 生徒ひとりひとりの成長がわかるような手立てを考える。
- (2) 三年間を見通した単元学習を組む。
- (3) 言語事項の指導のし方を工夫し、確かな言葉の力をつける。

おわりに

学生時代「教師は生徒から学ぶ」という言葉はきれいだと思っていた。しかし実際に生徒と対話し、文章で表現された彼等の一生懸命な姿に触れて、その言葉が本当だとわかった。日常に埋もれて鈍りがちな自分の感性が、「オレは強く生きたいと思っている」の一文に叩き起こされる。私はそうやって彼等から吸収したエネルギーを、かみ砕いたり別の色に変えて還元し、また自分も成長していきたいと思う。

(広島市立牛田中学校教諭)

表現工

(年()組()番()

- ① サラダ
- ② 松
- ③ しゃちゆ
- ④ ちつし
- ⑤ ダイアモンド
- ⑥ 名だ
- ⑦ どじょう
- ⑧ コーヒー
- ⑨ マーガリン
- ⑩ 材料書
- ⑪ 風邪(かぜ)
- ⑫ 太陽
- ⑬ オーストラリア
- ⑭ めまぼこ
- ⑮ トラック
- ⑯ 野球
- ⑰ 百(ゆみ)
- ⑱ リボン
- ⑳ 水
- ㉑ 鳥

A

表現工

(年()組()番()

- ① コロケ
- ② 桜(さくら)
- ③ マヨネーズ
- ④ おおめみ
- ⑤ 銀
- ⑥ ボタン
- ⑦ うなぎ
- ⑧ ジュース
- ⑨ パン
- ⑩ ノート
- ⑪ むし歯
- ⑫ 月
- ⑬ メキシコ
- ⑭ ぎやうざ
- ⑮ ロケット
- ⑯ 剣道(けんどう)
- ⑰ めぶと
- ⑱ はらまき
- ⑳ 風
- ㉑ 親切

B

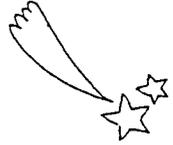
地球人調査報告書 (丸)

対象者の名前： _____

年齢： (凡歳) _____

性別： (甲) _____

対象者の職業： _____



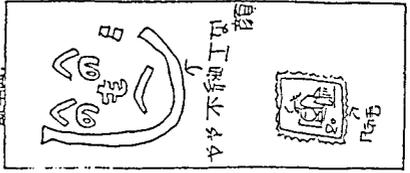
母国は「オーストラリア」の「シドニー」です。
 朝は「日本時間」午前六時三十分「目覚まし」音で起き、お風呂に入ります。
 下着は「綿」の「Tシャツ」を着、お風呂に入ります。お風呂は「シャワー」です。
 お風呂は「湯」を「熱」にして「湯」に入ります。湯は「熱」です。
 お風呂は「湯」を「熱」にして「湯」に入ります。湯は「熱」です。
 午後三時三十分「眠」を「覚」醒させます。「お風呂」に入ります。
 夕食は「肉」を「焼」いて「食」べます。
 食後は「テレビ」を見たり「本」を読んだり「音楽」を聴いたりします。
 朝は「目覚まし」音で起き、お風呂に入ります。

日本時間午後五時三十分「眠」を「覚」醒させます。
 夕食は「肉」を「焼」いて「食」べます。
 食後は「テレビ」を見たり「本」を読んだり「音楽」を聴いたりします。
 朝は「目覚まし」音で起き、お風呂に入ります。

性別：「オーストラリア」の「シドニー」です。

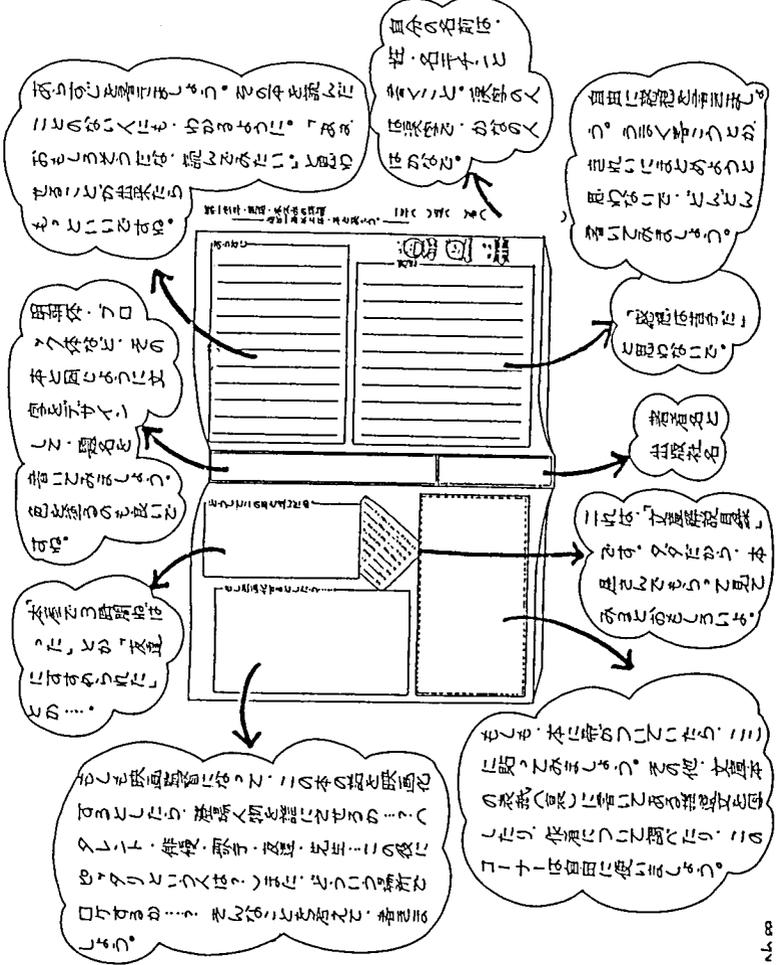
趣味：「テレビ」を見たり「本」を読んだり「音楽」を聴いたりします。

他の趣味：「テレビ」を見たり「本」を読んだり「音楽」を聴いたりします。
 趣味の種類：「テレビ」を見たり「本」を読んだり「音楽」を聴いたりします。
 趣味の場所：「テレビ」を見たり「本」を読んだり「音楽」を聴いたりします。
 趣味の時間：「テレビ」を見たり「本」を読んだり「音楽」を聴いたりします。



女子の「地球人」です。
 調査員：「地球人」です。

No.11-D3-2



恒例「夏休み新聞」の作り方

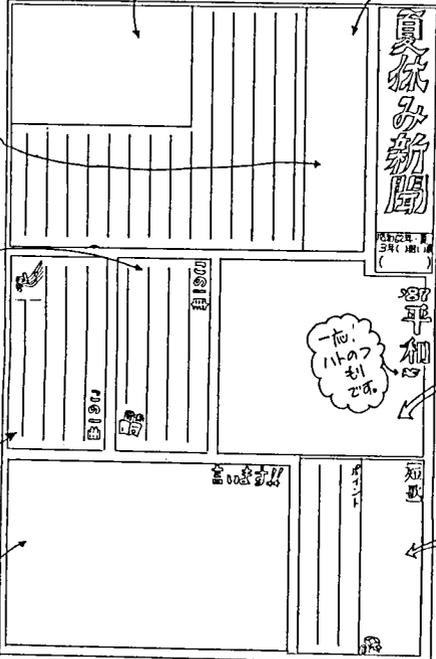
三年（一組）（巻）

大夏生しだいら、ちゃんど太き。レタリングして時、週刊誌風も可。

今年の夏の体験、まわりで起こった事件何でもよい一日など、新新聞記事風に書く。

報道写真のかわりの絵を書く。田エエのツも使、リアルに。絵や書きなどを貼るのも良い。

ちなみに、去年の例は、「東京デズニエランド」「日焼けと無様な姿」「合宿始まる」「羨しい、たぬの海」「シュート連続」「不調からたらなるるー」「今も生さる活火山」「決行、第三回祭旗遊行」「樹光地を流すンに！」「宮内氏大げが？」「など



夏休み中の新聞記事で、平和に関するものを切、て貼る。

一冊のついで

短歌（五七五七七）を作り、市イントのヒコで、この短歌は、この言葉が、こういう情景をあらわしている、非常に素晴らしい。など自分自身で採る。

自分の推選する本の題名と、作者を書き、どこが良いかを簡単に説明する。ジャンルは問わない。

自分の推選する曲の題名と、作曲者を書き、どこが良いかを簡単に説明する。ジャンルは問わない。

ある日の新聞のコラム、投票権、事件などを切、て貼り、そのことについての自分の意見を自由に書いてみる。共感、疑問、怒りなどなど

- ★思い出の一つのついでに、おまけとして、おくまやち福子のへんみ
- ★書き換えて、切手を貼れば、たちまち、返事を持って時流れたす
- ★「おや、!?」といつ、志業旅行して、教室の会館大オオヤ、オヤ、を決心
- ★伍話のグリーンピースが、夏夜中に、あけろあけろと叫んでいる
- ★「元気のね」マッドナルドの片隅に、最後の手紙を書きあけてあり

No.

